

「枕草子に描かれた花(1)」

— 卯の花について —

崔賢珠*

目次

1. はじめに
 2. 和歌と卯の花
 - (1) 卯の花に対する評価
 - (2) 卯の花を車に飾る
 - (3) 神に供える卯の花
 - (4) 卯の花と物憂し
 - (5) 卯の花とほととぎす
 - (6) 卯の花と山里の風景
 3. 終わりに
-

1. はじめに

枕草子は實に多様な内容の書かれた書物である。そのうち、何をとりあげても枕草子らしさがよくあらわれていると考えているが、作品の個性が、もっともよく表れているのは、自然描寫の記事ではないかと思う。そこで、枕草子の中に挙げられている自然、特に花の描寫に關する考察を通して、枕草子の作品全般に表われる特徴を考えてみたい、と思う。その始めとして、今回は枕草子に描かれた多くの花の中で、「卯の花」に關する記事を取り上げて考察したい。特に卯の花を取り上げた理由は、卯の花が万葉集以來多くの和歌に詠まれつづけた花であり、平安時代にも和歌はもちろん、物語にも用いられた花であるからである。長い間愛好された卯の花であるからこそ、枕草子に描かれた卯の花に關する表現の特色の手掛かりを得ることができるだろう、と考えられる。

2. 和歌と卯の花

(1) 卯の花に対する評価

「卯の花」は、枕草子の中に、「三八段、鳥は」「九五段、五月の御精進のほど」「二〇八段、見物は」¹⁾

* 武庫川女子大學大學院 文學研究科 日本語日本文學專攻 博士後期課程 日本古典文學

1) 以下、段數は、増田繁夫校注・和泉古典叢書『枕草子』和泉書院（1995.3.31）による。

の三つの段にとりあげて描寫されている。この三つの段に卯の花の記事があるというのは、三卷本枕草子の場合である。つまり、三卷本の「三四段、木の花は」の段には、「紅梅・櫻・藤・橘・梨・桐・棟」だけを上げ、卯花を上げていないということである。これに比べ、能因本・前田家本では、「三四段、木の花は」の段に、「紅梅・櫻・藤」に續いて「卯の花」を挙げて、「紅梅・櫻・藤・卯の花・橘・梨・桐・棟」の七つを挙げていて、三卷本や界本とは大きく違いがある。三卷本には見えない卯の花が、能因本には記されている理由について、岸上慎二氏は、中宮定子の失脚を経験した後の、清少納言の追加であると言っている。

「卯の花」は、「木の花は」として考へる時、紅梅・櫻などに互して列挙さるべきものではない。その点、榮華時の定子後宮において清少納言はその初稿においては列挙しなかつた必然性を十分理解できる。都會的な貴族ごのみ木の花観によつてその文章が構成されたが、定子の失脚といふ悲境を経験し、再度の後宮生活においては、鄙的な内容を許容する態度に変化して、特に長徳四年五月、郭公をききに賀茂の奥に出かけ強烈な「卯の花」についての体験をした結果、再稿に「卯の花」の項目の文章を増補したといふのである。²⁾

すなわち、貴族趣味の清少納言は、最初、「木の花は」の段に「紅梅・櫻・藤・橘・梨・桐・棟」の貴族的趣向の花だけを挙げていた。それが、定子の苦境などに影響され鄙びたものをも許容する精神的成長があつて、改稿した時には卯の花の記事を加えた、というのである。実際に、能因本枕草子に挙げてある卯の花に関する記述を見ても、卯の花を鄙の世界の花として上げているのがよくわかる。能因本枕草子にある卯の花の記事を上げると、次のようである。

卯の花は品おとりて、なにとなけれど、咲くころのをかしう、ほととぎすの、蔭に隠るらむと思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣ねなどにいとしろさきたるこそをかしけれ。青色の上に白き單衣襲かづきたる、青朽葉などにかよひてなほいとをかし。³⁾

卯の花は、上品でなくて別にたいした花ではないけれども、咲く頃が面白く、ほととぎすがどうしてその花の蔭にかくれているのだらうと思うと、まことに趣がある。賀茂の祭の使いの歸りの行事の時に、紫野のあたりに近い卑しい家々や、亂れ茂っている垣根などに、とても白く咲いているのは實に面白い。(そのさまが)青色の上に白い單襲を着込んだ、青朽葉の色などに似通っていて、いっそうすばらしく思われる、というのである。すなわち、卯の花に対する評価は、上品ではなく身分の低い人の家に咲く花として考えられたのであろう。

(2) 卯の花を車に飾る

それでは、枕草子にある卯の花の描寫を一つ一つ詳しく検討してみたい。三卷本枕草子には三つの段に卯の花の記事があつて、「三八段、鳥は」、「九五段、五月の御精進のほど」、「二〇八段、見物は」の段がそれである。そのうち、卯の花をもっとも印象的に記したのが、「九五段、五月御精進のほど」である。第九五段は、長徳四年(九九八)五月の出来事と推定される章段である。關白藤原道隆の薨(長徳

2) 『枕草子研究』(六) 木の花はの段 新生社・1970年、p.140

3) 田中重太郎『日本古典評釋・全注釋叢書枕草子全注釋(1)』角川書店(1979年)pp.353~354。

元年四月)後、その翌年、道隆の長男で中宮定子の兄である伊周が、叔父道長との政權争いに敗北し、左遷される(長徳二年)。そのため、清少納言の仕えた中宮定子は宮中に居られなくて、職曹司に移るなど、たいへんつらい時期であった。この段の始めの、「五月の御精進のほど、職におはしますころ」とは、このような主人の不幸の眞最中であったことをいうのである。けれども、この第九五段は、枕草子のほかの章段の記事がそうであるように、定子の不幸な様子をうかがわせるような描寫は一切されていない。あくまでも明るくて、楽しそうな記事で一貫している段である。第九五段には色々な話を書いているが、卯の花に關する描寫の部分を中心に要約すると次のようにある。

五月の初めから雨降りが多く曇天(どんてん)の日が續いたので、所在なさに「ほととぎすの聲を聞きに出かけたいねえ」とつぶやく清少納言の獨り言を聞いた女房達が「私も私も」と騒ぎだす。中宮の許可を得て出かけた清少納言一行が、歸途に折り取った卯の花を車のあちらこちらに挿して飾り、その卯の花を飾った車の風情を分ってくれる人として、侍從(藤原公信)に見せる話である。卯の花の記述は、ほととぎすの鳴聲を聞きに出かけた清少納言一行が、雨が降るといので慌てて歸途に上った時、その歸り道で見た卯の花を車などに飾って皆がさわぐ様子を描くところからはじまる。盛りに咲いていた卯の花を車に飾るところについては、

卯の花のいみじう咲きたるを折りて、車の簾、かたはらなどに差し余りて、おそひ、棟などに、長き枝を葺きたるやうに差したれば、ただ卯の花の垣根を牛にかけたるとぞ見ゆる。供なる男どもも、いみじう笑ひつつ、「ここまだし、ここまだし」と差しあへり。

と記している。盛りに咲いている卯の花を折って、車の側面や簾など一面に挿し、さらに車の覆いや棟などに、まるで葺くように長い枝を差したので、卯の花の咲いた垣根をそのまま牛に引かせているように見えた。供の男たちも聲を立てて笑いながら「こっちがまだだ、ここがまだ足りない」と言いながら皆で挿した、というのである。

「三四段、木の花は」の段で、櫻の花びらの大きさや葉の色などについて、詳しく描寫している清少納言が、ここでは卯の花を目の前にしながらも、その花の色や形については、一言も記していないのは不思議である。能因本にも卯の花を「木の花は」の段にあげて記述してはいるが、卯の花の有り様の詳しい描寫はされていない。後にも述べるが、卯の花については、和歌にも枕草子にも「卯の花の垣根」というふうに、たくさんの卯の花を植え並べた垣根に注意して取り上げている描寫が多い。また、白い卯の花の色には注目したらしい。すなわち、卯の花の場合、花の形や色を一つ一つ精緻に觀察するよりは、群れて咲いている「白色」の花の姿全体に興味を持ち、好んだかと思われる。

さて、卯の花を飾った車に乗って歸ってゆく清少納言は、卯の花の車に心がうかれたのか、その車を他の人に見せたがっている。

人も會はなん、と思ふに、さらにあやしき法師、下衆のいふかひなきのみ、たまさかに見ゆるに、いとくち惜しくて、近く來ぬれど、「いとかくてやまは。この車の有様ぞ人に語らせてこそやまめ」とて、一條殿のほどにとどめて、「侍從殿やおはします。郭公の聲聞きて、今なん歸る」と言はせたる使、「『ただ今參る。しばし、あが君』となん宣たまへる。侍に、まびろけておはしつる、急ぎ立ちて、指貫たてまつりつ」と言ふ。

「誰か人がこの車に出會ってくれないか」と思っていると、たまに會う人というのが、身分の低い法

師や下衆などばかりだったので、たいへん残念に思う。清少納言が、このように身分の低い人々に車の様子を見られても満足しないのは、身分の低い人には卯の花を飾った車の有様を見ても、それに興味をもつような教養がない、と判断したのであろう。つまり彼女が車を見てもらいたい、と探していた「人」とは、卯の花を飾った車を見て、それがどういう情趣を表現したのか理解してくれる、教養のある貴族だったのである。内裏近くまで来た清少納言は「この車を人々に見てもらって、噂してもらわなければやめられない」と思って、通り路に住んでいる侍従に見てもらおうと、わざわざ使いを遣るほどに、卯の花を飾った車に愛着を持ち、その車を見せたがっている。

(3) 神に供える卯の花

使者の話聞いた侍従の反応も並々のものではない。初夏の暑さに堪えがたかったのか、屋敷の内で指貫など脱いでくつろいでいたのを慌ただしく着て、道を走りながら帯を結うほど急いでやってきたのである。清少納言は「ほととぎすの鳴き聲を聞いて歸るところだ」と使いを遣ったのだが、侍従は使いから車に卯の花をたくさん飾ったことも聞いて、その車を見たいと思ったのであろう。ただ、ほととぎすの歌を聞くためにだけ、道を走ってくるようなことをする、とは考えにくいからである。そして、あわただしく走ってきた侍従の反応は、次のようなものであった。

この車のさまをいみじう笑ひ給ふ。「うつつの人乗りたるとなん、さらに見えぬ。なほ下りて見よ」など笑ひ給へば、共に走りつる人、共に興じ笑ふ。

この車の様子をみた侍従は、大変面白がって、聲を高くしてお笑いになられる。「現実の人間が乗っているとは、どうしても思えない。下りてきてあなたも見なさい」など、お笑いなさるので、走ってきた供の人も、面白がって笑った、というのである。清少納言も侍従の反応にたいそう満足したらしい。侍従はもちろん、供の男たちの笑いまで記しているのは、卯の花を飾った車の情趣を理解してもらった彼女の満足感を表している。特に、「現実の人間が乗っているとは、どうしても思えない」という侍従の一言が、清少納言の期待した言葉だったのだと考えられる。「現実の人間が乗っているとは思えない」というのは、人間以外のもの、変化のものとか神などを考えているのであろう。つまり、卯の花を飾った車を見た侍従は、神様でも乗っているように思われると言ったのだと考えられる。

ここで、卯の花を飾った車から人間でないものの乗物という連想をした侍従は、次に上げる古今集時代の和歌を思い浮かべたからではないか、と考えられる。

神まつる卯月にさける卯の花はしろくもきねがしらげたるかな (拾遺集・九一・躬恒)
神まつるやどの卯の花白妙のみてぐらかとぞあやまたれける (拾遺集・九二・貫之)
まつる時さきもあふかな卯の花はなほうち神の花にぞありける (貫之集・三四二・貫之)
卯の花の色みえまがふゆふしでてけふこそ神をいのるべらなれ (貫之集・四三九・貫之)⁴⁾

「神まつる卯月」とは、神にお供えものをする四月のことである。躬恒の「神祭の行われる四月に咲

4) 以下、和歌の引用は新編国歌大観による。

いている卯の花は、巫女が搗(つ)く饌米(神に供える米)のように眞白である」との歌をはじめ、上に挙げた歌は、卯月の神事と卯の花を結びつけて詠んだものである。また、貫之の「神祭る家の卯の花は眞っ白い御幣かと見間違えてしまったことだ」との歌も、四月の風物として、神事の行事をあげ、それに供えるものとして卯の花を詠んだ歌である。つまり、上に挙げた歌四首ともに、卯の花を神事の連想される卯月にかけて詠んでいるのがわかる。清少納言の乗っている車全体が卯の花に覆われている様子を見て、侍従がまっ先に「人間の乗っているとは、どうしても思われない」といったのは、これらの歌を意識して卯の花を挿し飾った車を、供えられた神の車と見たためであろう。

少し横道にそれるけれども、卯月(旧暦四月)の花として和歌に取られた卯の花を、清少納言が五月の出来事に用いた理由について考えてみたいと思う。彼女が、卯の花を飾った車を見て「うつつの人の乗りたるとなん、さらに見えぬ」と、「神まつる卯月」の和歌を連想して答えた、侍従の反応に満足したことはよくわかった。だが、侍従の答えから考えられる「神まつる卯月」と、この「九五段、五月の御精進のほど」の間には、「四月」と「五月」という違いがある。これをどう理解したらいいだろうか。枕草子にある他の卯の花の記事を見てみよう。「二〇八段、見物は」には、「祭の還さ」の記事が詳しく記され、そのついでに卯の花の記事がつづいている。第二〇八段の「祭の還さ」とは、賀茂祭の当日、齋王の行列が一条大路を東行し、賀茂川堤を北上して、まず下社に着き、そこから上社に向い、上社に一泊し、翌日上社から大宮大路の末の道を南行し、紫野院に歸るのをいう。⁵⁾ これを見物するために多くの人々が集まっていたのだが、清少納言も大勢の人々に混じって見物したのである。賀茂祭は、旧暦四月中の酉の日に行われる祭である。この四月にみた卯の花については、次のように記している。

卯木垣根といふものの、いと荒々しく、おどろおどろしげにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくも開けはせず、つぼみたるがちに見ゆるを、折らせて、車のこなたかなたに差したるも、桂などのしぼみたるがくち惜しきに、をかしうおぼゆ。

(二〇八段、見物は)

この記事には、「卯の花の垣根」でなく、「卯木垣根」と表現しているのも、また、考えるべき点の一つである。「卯の花」には、いろいろ異名があるので、⁶⁾「卯の花の垣根」と「卯木垣根」とが全く違う木の花を指しているとは考えられない。けれども、清少納言が強いて「卯木垣根」と言って、區別しているのは何か理由があるだろう。まず考えられるのは、まだ蕾(つぼみ)の状態であって、花が目立たない状態であることを強調するためかと思われる。また、「うつぎ垣根といふものの」と言っている部分に注意すべきである。「……といふもの」とのいい方は、自分の目でみて、よく知っているものに對しては、つかわない言葉である。彼女がこう書いたのは、耳にしていたが、あまりよく見たことのなかったうつぎを、あるいは卯の花を、いま詳しく自分の目にした、という氣持を表すと考えられる。これに加えて作者が、ほんとうに山里のような風景というのを強調するためではないかとも考えられる。

さて、「神まつる卯月」と枕草子の記事が五月の出来事であることの問題に戻ってこよう。卯の花の

5) 増田繁夫校注・『枕草子』p.176、頭注三参照。

6) 卯の花：ユキノシタ科の落葉低樹、自生・栽植。高さ約二メートル。「空木」「空木の花」の古名。五月頃、白色の五瓣花を開く。花後、球形の實を結ぶ。同義「花卯木」「山空木」「更紗空木」「垣見草」「初見草」「潮見草」「雪見草」「夏雪草」。漢名「水晶花」(『日本うたことば表現辞典①』植物編(上) pp.73~74)

花期は必ず四月、ときまっているのではない。花期は地方によって、その年の気温差によって、少しずつ違うこともあろう。古く万葉集には、

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けども飽かずまた鳴かぬかも (万葉集・一九五三)

時ならず玉をぞ貫ける卯の花の五月を待たば久しくあるべみ (万葉集・一九七五)

と、卯の花を五月に咲く花として詠んだ歌が二首ある。だから、枕草子の「九五段、五月の御精進のほど」の段にある、卯の花の咲いていた風景の記事が不正確というわけではない。第二〇八段に描かれたうつぎは、「いと荒々しく、おどろおどろしげにさし出でたる枝ども」と、とても荒々しく気味悪いほど茂った有様に描寫されている。これに比べて、第九五段の卯の花は、皆が楽しむ花として取り上げている。同じ卯の花であるのに、上のごとく全然違う風情に取られているのは、作者の個人的な好みによるものだとも考えられる。清少納言が五月好きであることは、枕草子に多く書かれている。たとえば、「三六段、節は」の段には、眞先に「五月にしく月はなし」と言っているし、「二〇八段、見物は」の段では「五月こそ、世に知らずなまめかしきものなりけれ」など、といている。このように五月が好きで清少納言だったので、五月の卯の花につよく心が惹かれ、とりあげるようになったのであろうと考えられる。

(4) 卯の花と物憂し

さて、このように和歌によまれる卯の花から發想される趣向は、卯の花を神に供える花に見立てる意識にとまらない。清少納言一行が、ほととぎすの鳴き聲を聞きに出かけたこの日は、雨がちの天気だったが、侍従に會って話している間、本格的に雨が降り出してきた。供の男達は、笠を持たなかつたので一刻も早く車を宮中に入れようとする。一方、侍従も家の中でくつろいでいたのを、清少納言の使いの話を聞いて、慌てて走ってきたので笠をもっていない。清少納言が宮中に入ろうと誘ったが、侍従は、服装が整っていないことを理由に断って、屋敷から持ってきた笠をささせて、ゆっくりと歸っていく。歸っていく侍従の後ろ姿を、清少納言は次のように記している。

一條殿よりもてきたるをささせて、うち見返りつつ、こたみはゆるゆると物憂げにて、卯の花ばかりを取りておはするも、をかし。

一條殿から持ってこさせた笠を差させた侍従は、清少納言の乗っている卯の花を飾った車を、何度も振り返ってみながら、慌てて走ってやってきた時の様子とは違って、今度はゆっくりと氣の進まない様子で、卯の花だけを手にとってお歸りになるようすも心惹かれる、といている。

この「こたみはゆるゆると物憂げにて、卯の花ばかりを取りておはする」という部分の「物憂げ」の語は、「憂し」に「卯の花」をかけた表現である。これは、次にあげる歌のように、「卯の花」に「憂し」をかけた和歌的な表現をもとにしたものである、と考えられる。

うぐひすの通ふ垣根の卯の花のうきことあれや君が來まさぬ (万葉集・一九九二)

郭公我とはなしに卯の花のうき世中になきわたるらむ (古今集・一六四・躬恒)

世中をいとふ山べの草木とやあな卯の花の色にいでにけむ (古今集・九四九・よみ人しらず)

うらめしき君が垣根の卯の花はうしと見つとも猶たのむかな

(後撰集・一五一・よみ人しらず)

郭公通ふ垣根の卯の花のうきことあれや君がきまさぬ (拾遺集・一〇七一・人麿)

これらの例の如く、卯の花に「憂し」の語をかけるのは、万葉集から行われていた表現である。これから枕草子が新しい發想の描寫ではなく、古くからの伝統的な歌の情趣を丁寧に受け入れて描寫していることがわかる。

(5) 卯の花とほととぎす

そもそも枕草子の第九五段は、その發端からほととぎすの鳴くのを聞きにゆくことをきっかけに始まった話であるが、ほととぎすもまた和歌では、卯の花に關係の深い景物であった。ほととぎすと卯の花の歌は万葉集からの歌詠みで、例えば、

ほととぎす來鳴きとよもす卯の花のともにや來しと問はましものを (万葉集・一四七六)

卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に來鳴きとよもす (万葉集・一四八一)

郭公我とはなしに卯花のうき世中になきわたるらむ (古今集・一六四・躬恒)

卯の花の咲ける垣根の月きよみ寝ず聞けとや鳴く郭公 (後撰集・一四八・よみ人しらず)

郭公通よふ垣根の卯の花のうきことあれや君が來まさぬ (拾遺集・一〇七一・人麿)

などの例がある。先に述べた、(4)卯の花と物憂しの項目にもあげた歌、「うぐひすの通ふ垣根の卯の花のうきことあれやきみがきまさぬ」のように、万葉集には卯の花にくる鳥として、ほととぎすのほか、鶯が詠まれた歌の例もある。それが古今集になると、ほぼほととぎすに固定したのである。以上の神に供える卯の花、物憂し、ほととぎすなどをふまえた枕草子第九五段の卯の花に關する記事は、全般的に古今集時代の和歌的な發想に基づいたもの、と言えよう。

續いて、枕草子の、卯の花の描かれたほかの章段の描寫を探ってみよう。第九五段に比べれば短い、「三八段、鳥は」「二〇八、見物は」の段にも、卯の花に關する記事の例がある。次に上げる第三八段は、「鳥は、異所のものなれど、鸚鵡、いとあはれなり。人の言ふらんことをまねぶらんよ。郭公。水鷄 (くひな)。鳴 (しぎ)。都鳥。ひは。ひたき」など、清少納言の關心を持つ鳥を挙げた章段である。そのうち注意すべきのは、ほととぎすとともに記された卯の花の記事である。

郭公は、なほ、さらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞えたるに、卯の花、花橘などに宿りをして、はた隠れたるも、ねたげなる心ばへなり。(三八、鳥は)

ほととぎすは、やはりいまさら言い表現しようがないくらいすばらしい。いつの間にか得意満面に鳴いているのに、卯の花や花橘などの葉陰に宿って姿を隠れているのも、小憎らしい習性である、とほととぎすのやってくる場所として卯の花と橘の花をあげている記事である。

次も同じく、卯の花がほととぎすの親しい花であることをいったものである。

扇よりはじめ、青朽葉どものいとをかしう見ゆるに、所の衆の、青色に白襲を氣色ばかり引きかけた

るは、卯の花の垣根近うおぼえて、郭公も陰に隠れぬべくぞ見ゆるかし。

(二〇八、見物は)

この文は、賀茂祭を見物していて、待ち遠しかった齋王の行列が、やっと近づいてきたときの様子を描いたものである。藏人所の衆の着ている青色の袍から、白襲の裾が少し覗いているのをみて、白い卯の花の咲いている垣根が連想され、ほととぎすまでがどこかに隠れているような気がする、というのである。清少納言の得意な、色彩感覚が発揮され、鮮やかな色彩の対比を描いた記事であるが、この卯の花の咲いた垣根というのも、次に挙げる万葉集以来の、和歌的な発想に基づいた描寫である。つまり、第三八段や第二〇八段にある卯の花の描寫も、前に挙げた和歌的な情趣の、卯の花とほととぎすの組み合わせと同じ表現である。ただ、清少納言が藏人の襲の色から、卯の花の咲いた垣根を連想するほど、卯の花を身近く感じていたことは確かであろう。

(6) 卯の花と山里の風景

枕草子には卯の花について、「うつぎ垣根」や「卯の花の垣根」の語で表現しているが、「卯の花の垣根」とは、和歌でもよく詠まれる表現である。たとえば、

うぐひすの通ふ垣根の卯の花のうきことあれや君が來まさぬ (万葉集・一九九二)

うらめしき君が垣根の卯の花はうしと見つとも猶たのむかな

(後撰集・一五一・よみ人しらず)

時わかずふれる雪かと見るまでに垣根もたわに咲ける卯の花

(後撰集・一五三・よみ人知らず)

わが宿の垣根や春をへだつらん夏來にけりと見ゆる卯の花 (拾遺集・八〇・順)

卯の花をちりにしむめにまがへてや夏の垣根に鶯の鳴く (拾遺集・八九・平公誠)

卯の花の咲ける垣根に宿りせし寝ぬに明けぬとおどろかれけり (拾遺集・一〇七二・重之)

などが、その例である。つまり、第二〇八段に「卯の花の垣根近うおぼえて」とあったのは、和歌的な発想の言葉づかいであるといえよう。

同じ第二〇八段には、もう一つ卯の花の記事がある。卯の花の異名について話した時の例文と重なる部分もあるが、理解のため繰り返して上げる。

内侍の車などのいと騒がしければ、異方の道より歸れば、まことの山里めきてあはれなるに、卯木垣根といふものの、いと荒々しく、おどろおどろしげにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくも開けはせず、つぼみたるがちに見ゆるを、折らせて、車のこなたかなたに差したるも、桂などのしぼみたるがくち惜しきに、をかしうおぼゆ。

(二〇八、見物は)

これは、祭見物の歸途に混雑を避けて、行った時と違う道を通って歸る時に見た風景の描寫である。本当に田舎のような情趣の風景で、卯木垣根というものがとても荒々しく、氣味悪いほど茂って、道まではみ出している枝などが多いのに、花はまだ充分咲ききらず、つぼみがちに見えるのを折ら

せて、車のあちこちに挿したのも、桂などがしぼんでしまったのが残念だが、趣きがある、という内容である。

ここで注目したいのは、「まことの山里めきて」の部分である。卯の花の垣根が、和歌に詠まれ、枕草子にも記された風景であることは、すでに述べたとおりである。垣根に卯の花を植えるのは、貴族たちの家ではなく、都から離れた田舎に住む人々で、家の粗末な垣根に卯の花を植えたのであろう。即ち、卯の花は身分の低い庶民の家の垣根などに植える木の花であって、卯の花は田舎風の情趣が感じられるものだったのである。「卯の花の垣根」ではなく、「卯木垣根」と区別しているのや、「いと荒々しく、おどろおどろしげにさし出でたる枝」などと記しているのは、山里の風景を強調する表現と考えるというのはすでに述べたとおりである。枕草子の他、『源氏物語』にも、卯の花に関する描寫が一つあって、田舎らしい風景を表す景物として挙げられている。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、吳竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯花の垣根ことさらにしわたして、昔おほゆる花橋、撫子、薔薇、くたになどやうに花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、その中にうちまぜたり。(少女)

これは、光源氏が六條院を造成した際、夏の風景を見るための庭の様子を描いた部分である。北東の花散里の住いは、涼しそうな泉があって、庭は夏の木陰を主として造ってある。御前に近い前栽は、吳竹を下風が涼しく吹き通うように植えて、高い木が森のように重なり茂っていて、山里の風情があり、卯の花の垣根をわざわざめぐるし作って、昔をしのばせる花橋、撫子、薔薇、くたになどのような花をいろいろ植えて、春と秋との木や草をその中に所々混ぜてある、というのである。つまり卯の花を植えることで、山里の風情を表した、というのである。

卯の花の垣根という言葉で、間接的には田舎の風景を、あるいは粗末な家の様子を表したのは、万葉集以来、和歌の伝統的な表現であった。これをより具体的に「山里」の風景として、和歌で表現したのは拾遺集以後のことである。例えば、

山里の卯花に鶯の鳴き侍けるを
卯の花をちりにしむめにまがへてや夏の垣根に鶯のなく (拾遺集・八九・平公誠)
卯の花のをらまくほしき山里に時鳥さへ來つなくなり (順集・二〇五・源順)
年をへて通よひなれにし山里のかどとふまでにさける卯花 (公任集・六七・藤原公任)

などの歌がその例である。これらの歌人たちは、清少納言と同時代の人である。言い換えれば、このように卯の花を「山里」の風景としてよむのは、古今集など作者以前の時代の歌に比べて、新しいよみ方の歌であると言えよう。すなわち、枕草子は万葉集や古今集などの伝統的な和歌はもちろん、作者の生きた時代に流行している歌の世界にも敏感に対応して書かれた作品であるといえる。

3. 終わりに

以上、枕草子の中に描かれた卯の花の描寫を通して、枕草子の自然描寫の特徴を考察した。枕草子

にある卯の花の記事は、神に供える花としての卯の花、卯の花の「う」に憂しの「う」をかけた表現、卯の花とほととぎすの組み合わせなど、万葉集からの伝統的な情趣を丁寧に受け入れて書かれている。また、卯の花の垣根をもって、粗末な田舎の風情を表わしたのを、もう少し具体的に山里の風景として表わしたのは、枕草子が書かれた時と同じ世代の新しい発想であることがわかった。このように、枕草子には新旧の和歌的情趣のすべてが溶け込まれているのである。この点が多くの人々に共感を与え、長い間詠まれ続けられた理由になったのであろう。

しかし、枕草子は和歌の趣を踏襲することにとどまらない。山里の風景を表わす卯の花の垣根の表現においては、卯木垣根と區別していい、道まではみ出している枝のようすを強調することによって、もっとも山里めいた風景に描き出している。このように、小さな手がかりを大事にする点は、枕草子のなかにたくさん表れている。たとえば、「三四段、木の花は」の段にある、梨の花や桐の花、棟の花の描寫がそれである。梨の花は、愛敬のない人の顔にたとえるほど評価してもらえなかった。しかし中國の詩では、楊貴妃にたとえる花として評価するのを見て、改めてみて花びらの端のほのかな赤さの素晴らしさがわかった、というのである。また、桐の花は、葉の廣がり様などは気に入らないが、紫色の花が咲いているのは素晴らしい、という。棟の場合は、木のありさまは格好よくないが、花が大変よい。乾燥したように普通の花びらと違った様子に咲き、しかも五月五日端午の節供に合うように咲くのも興味深い、といている。作者は、各々気に入らないところのある花を、中國の詩や花の花期などを通して、梨の花や桐の花、棟の花の持っている素晴らしさ美しさを知り、新しく評価して楽しむことができたのである。以上のように、和歌やほかの文獻であり、作者の個人的な趣向であり、皆が共感することのできる情趣をふまえながら、枕草子らしい斬新さを持つことによって、長い間、枕草子が愛されつづけたのであろう。

【参考文献】

- ・ 日本うたことば表現辭典刊行會編(1997) 『日本うたことば表現辭典』遊子館
- ・ 岸上愼二(1970年) 『枕草子研究』新生社
- ・ 上坂信男・神作光一他(1999・2001) 校注『枕草子』上・中、講談社
- ・ 田中重太郎(1979年) 『日本古典評釋・全注釋叢書枕草子全注釋』角川書店
- ・ 萩谷朴(1981) 『枕草子解環』同朋舎出版
- ・ 増田繁夫(1995) 校注・和泉古典叢書『枕草子』和泉書院
- ・ 有精堂編集部編(1975年) 『枕草子講座(一)』有精堂

要 旨

枕草子の多様な内容のうち、もっとも作品の特徴がよく表れているのが、自然描寫の記事ではないかと思う。そこで、枕草子の中にある自然、特に花の描寫に關する記事の考察を通して、枕草子の作品全般に表れる自然描寫の特徴を考えてみたい。そのはじめとして、今回は、万葉集から多くの歌に詠まれ、愛された卯の花に關する記事を取りあげて考察したいと思う。

枕草子には、三つの段に「卯の花」の記事があつて、「三八段、鳥は」「九五段、五月の御精進のほど」「二〇八段、見物は」の段がそれである。そのうち、卯の花をもっとも印象的に記したのは、第九五段である。この段には、清少納言の乗っている車に、たくさんの卯の花を差し飾ったのをみて、神に供えるものとして連想した記事がある。他に、「卯の花」の「う」に「憂し」をかけた和歌の表現や、古くから「ほととぎす」が親しみを感じる花としての卯の花の描寫がある。また、「卯の花の垣根」で田舎の風情を表し、「山里」の風景と詠んだ歌詠みなどの、和歌的な表現に基づいて描いていることがわかる。これらの枕草子の第九五段にある「卯の花」の記事からわかるのは、枕草子が、万葉集以來の和歌的な情趣や、枕草子の書かれた同世代の歌人たちの間に流行した、新しい和歌的表現までを充分受け入れている点である。しかし、枕草子は伝統を踏襲しているだけではない。山里の風景を描くところでは、「卯の花の垣根」をもって山里の風景を詠んだ歌とは少し違って、「卯木垣根」と區別して表現している。これは、伝統的な和歌の情趣を受け入れながら、一方では枕草子なりの個性を保っているのを示し、この点が讀者として共感とともに新しさを感じさせ、長い間詠まれつづけられた源泉になったのであらうと考えられる。

キーワード：卯の花・神・憂し・ほととぎす・垣根・山里

투 고 : 2004. 2. 28
1차 심사 : 2004. 3. 13
2차 심사 : 2004. 4. 3

住 所 : 663-8181 兵庫縣西宮市若草町2丁目8-23-302

電 話 : 090-3704-5498

E-mail : satobito@hanmail.net(韓國語)

chjoo112@yahoo.co.jp(日本語)

K C I